Jターン

福島県→千葉県→弘前市

永井 温子さん
株式会社 Ridun
（農業）
2021年8月創業

Case 02

異業種だからこそできる りんご文化を伝える農家に。

地域おこし協力隊として弘前市に居住した永井さん。
りんご農家を増やすためのミッションだったはずが、気がつけば自らがりんご農家として創業することに……。

先延ばしにしない と決めた

若手りんご農家として活躍する永井温子さんは福島県出身で、弘前大学を卒業後、東京の広告会社で営業職に就いた。いつかは東北に戻ろうと考えていたが、大学生時代にお世話になった人の訃報を耳にし、「やりたいことを先延ばしにしてはいけない」と一念発起。会社を辞めて2019年4月、地域おこし協力隊として弘前市に戻ってきた。永井さんに与えられたミッションは、「後継者不足解消のため、りんご農家になりたい人を増やす」ことだった。

自らも一からりんご栽培を学びながら活動を続けるうち、前例が少ないなら自分で畑をやってみようと思い立ち、まずは40アールのりんご畑を手に入れた。

りんご農家として創業

外から来た未経験者が簡単にりんご畑を持てるのだろうか。

「何度も通って、ちゃんと面倒見られると態度で示して理解を得るように努めた」と永井さん。

農家にとって我が子同然のりんご畑は、まっさらな土地を購入するのとは異なる難しさがある。創業にあたっては、ひろさきビジネス支援センターのサポートを受けた。その際、農地取得に融資してくれるのは日本政策金融公庫のみであること、事業計画書ではどこをアピールするべきかなどのアドバイスをもらい、無事畑を手に入れた。

2021年度末で地域おこし協力隊を卒業した。現在はりんご農家としてりんごを生産し、流通にのせやすいジュースも販売している。商品開発やパッケージデザイン、小売店への売り込みでは前職のプレゼン力が活かされた。最初に手に入れたのが「千雪」という希少品種だったため、なんとか魅力を伝えようとSNSを活用。その後、品種や味の違いを知ってほしいと15種類を飲み比べられるジュースを開発した。人気品種のみを扱う大規模農家とは一線を画すアイデアで、女性や若い消費者に好評を得ている。

りんご畑で県外の人を呼び込み、バーベキューや音楽イベントを開催。りんごにまつわる関係人口創出に力をいれる。県外でりんごをPRすることも

りんご生産を 文化ごと楽しむ

移住してから仕事と遊びの境目が曖昧になった。遊んでいるときに仕事のアイデアが浮かぶこともある。畑でバーベキューや音楽イベントを企画することも。

「畑に来る友人の職種はさまざま。農業にゆかりがなくても関わることはできる。市場ニーズ以外にも、別な視点からものの魅力を伝えられる人が必要」

木箱に印を付ける金属型に魅力を感じ、りんごジュースのデザインに応用した。青森に住んでいなくてもりんご作りに携われるような仕組みを作ろうと、「共に耕し、拓く」という畑をスタート。広告業界出身の永井さん自身も異なる視点を持つりんご農家であり、りんごの文化に光を当てる会社でありたいと願っている。

Ridun

Information
株式会社 Ridun
https://jp-ridun.com

永井さんの魅力は？

くわしくは動画をチェック！！

永井さんの創業まで

- 2019年4月 ▶ 地域おこし協力隊就任
- 2020年3月 ▶ 畑を借りる
- 2020年10月 ▶ 収穫りんご初販売
- 2021年8月 ▶ 株式会社 Ridun 創業
- 2022年3月 ▶ 地域おこし協力隊卒業

支援機関 担当からの一言

地域おこし協力隊として「りんごプロジェクト」で活動し、りんごを生産・販売するだけでなく広い視野で、りんごを通して地域での課題をどのように解決していくのか。生産農家の減少、新規就農者への研修制度、加工による付加価値の増強などの対応策を実現するなど、枠組みの改革にも積極的に取り組む永井さんの活躍に期待しています。